

～平成家族物語～舞台芸術によるまちづくりプロジェクト第1弾

『東松山戯曲賞』選評

選定委員：岩松了氏

『枇杷の家』を強く推した。

60歳前後の女性3人がルームシェアして暮らしているというシチュエーションで、それぞれの人物像が書き分けられている他に事件らしいことと言えばそのうちの二人(風子、薫)が同じ男性と、互いに知らないまま“いい感じ”になり、それを知ったもう一人(月子)があたふたとする、ということくらい。もちろんそれに伴う結果も事件と言えば事件だが、この戯曲の面白みは“うるさく生きている女たち”というところにある。それが遅くも見えるのだが、当人たちはそれなりに悩んでいる。でもその悩みを作者は遠景で見ているから、喜劇的であり同時に物悲しさを醸し出す。私は敬意をこめてこれを《くっちゃべり芝居》と呼びたいのだが、しゃべる内容はたえず具体的で、人物が受信した自分を取り巻くものへの反応、すなわち人物が受信したことをドラマとみなしており(このことは実は役者の演技ということにも関わる問題だが)、であるがゆえにこの戯曲は、作者の身勝手な理屈を発信して終わる戯曲とは一線を画している。むろん欠点もある。がそれは上演に向けて修正していけばいい。時間をかけて一本の戯曲を舞台化してゆくというのはこの戯曲賞の狙いでもある。ややもすればうるさいだけのしゃべる女の生理を見事に演劇に昇華させている点が評価に値する。

『空で千の鈴が鳴る』も面白かった。地を這うように生きる者たちを救おうとする空への希求が主旋律の戯曲と言えようか。それぞれの登場人物の役割への配慮も行き届いていて、その配置の上手さについて言うならば『枇杷の家』よりも上を行ってると思う。ただ、重要な小道具とも言うべきペンダントにもっとダイナミズムを感じたいし(ペンダントが羽田→星→羽田とわたる間に、とりわけ星にわたる間に何かあって欲しい)、星と同じ歳の子が羽田にいるということ(たった一行のセリフで説明してあるだけだが)もっとわからせる必要があるのではないだろうか。

他に『ひまわりは遠く』『離陸』も面白いと思った。

今回こうして東松山市が戯曲を募るという企画に私自身驚いたのだが、授賞作品を出せたこともさることながら予想以上に面白い作品が集まったことが嬉しかった。